

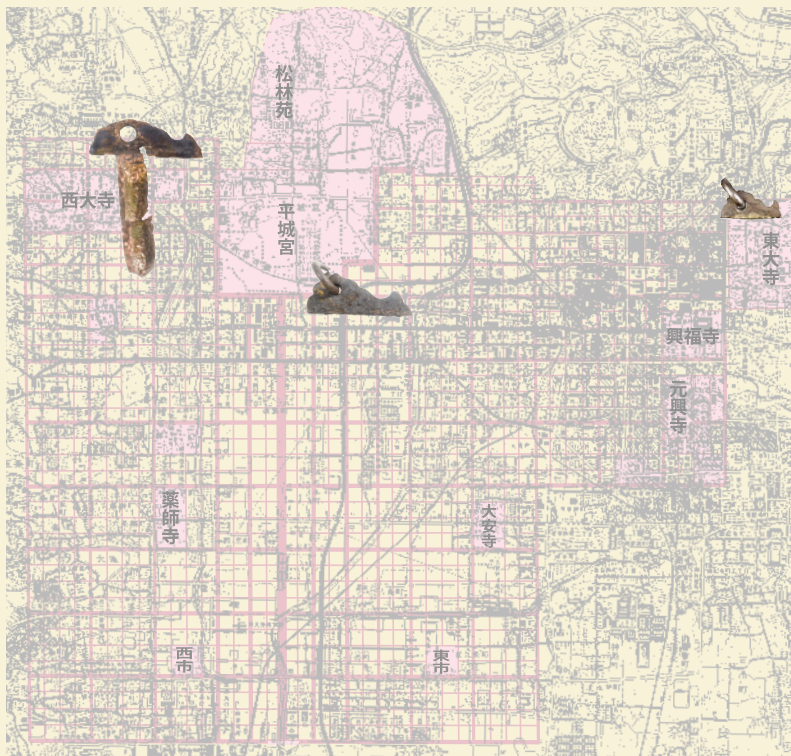
## 正倉院宝物と同じ刀子金具を発見！

2006年、西大寺<sup>じきどういん</sup>食堂院の発掘で、平城京内最大級の井戸が発見されました。板材を組み合わせた2.3m四方の井戸です。年輪からわかる井戸杵材の伐採が767年、井戸内に捨てられた一番新しい木簡の年紀が延暦11年(792年)と、この頃に使用された井戸です。井戸内からは食事具・食器・食べカスなど、お寺の「食事処」の様子がわかる多くの遺物が出土しました。この井戸の埋土を1200箱持ち帰り、根気よく水で洗って遺物を取り出す作業が2009年2月まで続けました。ある時、ポツリと現れたのが鯨のような形をした小さな金具。大刀の「山形足金物」と呼ばれるものに似ていますが、それにしても小さい(左下解説図の写真が原寸大)。調べてみると、正倉院宝物の刀子金具と同じものだと判明しました。中央の孔<sup>あな</sup>には小さなリング<sup>かん</sup>(鑲)がつき、そこに組紐(打紐)を通して腰に吊下げるための金具(帶執金具)です。

あらためて平城宮の過去の調査を見直してみると、平城宮東南隅(第32次調査)で出土した金具が同じものだとわかりました。こちらはリングも残っています。2つの金具を科学的に分析すると、表面に金も確認できました(右頁グラフ参照)。どうやら、金ピカの高価な金具だったようです。この金具は、正倉院宝物以外の発掘品としてはほとんど確認されておらず、大変高貴な人だけが持てる刀子だったようです。さて、平城宮東南隅では、金属生産に関する遺物が多く出土しています。もしかしたら、正倉院に入るような高価なモノを作る工房が近くにあったのかもしれません。今後の調査研究の進展に乞うご期待です。

(都城発掘調査部 城倉 正祥)

刀子帶執金具(原寸大)の出土地点



正倉院宝物 犀角把白銀蔓形鞘珠玉荘刀子(全長18.8cm:S=2/3)